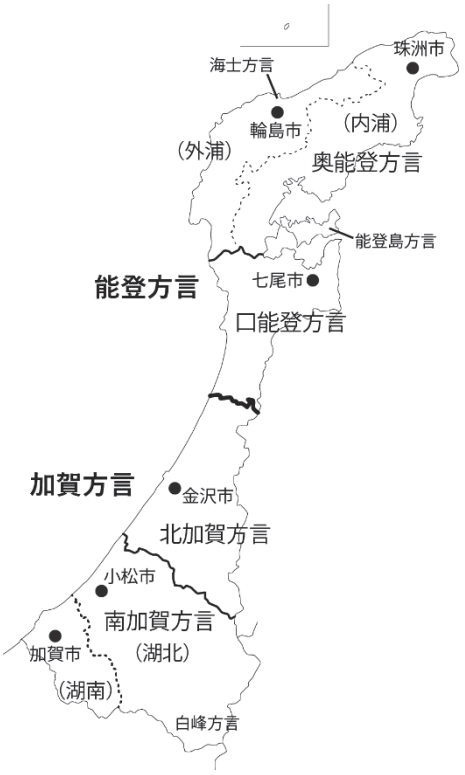
# 石川県能登島方言




**石川県方言区画図**

**【石川県の方言区画】**石川県の方言は、西部方言の中の北陸方言に属し、北部の能登方言と南部の加賀方言に大きく分かれる。両者は音韻・語彙・文法など様々な点で異なっている。例えば、能登方言においては「ズ・ス・ツ」と「ジ・シ・チ」の区別のないズーズー弁の特徴があるのに対して、加賀方言ではそのような特徴がみられない。語彙に関しては、ウラ―オラ（私）、ギャワズ―ギャット（蛙）、ナーン―ベッチャ（いいえ）、カライ―クドイ（塩辛い）といった加賀方言と能登方言の対立がある（いずれも「加賀―能登」）。

さらに、能登方言は北部の奥能登方言と南部の口能登方言に分かれ、加賀方言は北加賀方言と南加賀方言に分かれる。また、奥能登方言はさらに富山湾側の内浦と日本海側の外浦に分けられ、南加賀方言はさらに湖北と湖南に分けられる（湖北を中加賀、湖南を南加賀とする場合もある）。

また、海士（あま）町、能登島、白峰は周囲の方言との違いが顕著なことから、言語島とされる。

以上のように、細かい区画や言語島はあるものの、石川県の方言はおおむね南加賀・北加賀・口能登・奥能登の 4 つに区画される。

**【能登島方言について】**能登島は、七尾湾に浮かぶ島だが、現在は対岸の和倉温泉と能登島大橋でつながっており、七尾市中島地区（旧中島町）とは中能登農道橋でつながっている。2004 年の合併以降は行政区分上も七尾市に属する。能登島方言は、地理的には口能登方言と奥能登方言の中間に位置し、前述のとおり言語島とされる。特にアクセントの面において周囲の方言との違いが顕著で、京阪式アクセントが主流の石川県において、能登島は一部東京式アクセントが分布する地域として知られている。音声・音韻面については、イ段とエ段の混同や連母音/ai/が[æ]や[e]で実現されるといった特徴がある。文法面については、周辺の能登方言と大きく異なることはなく、おおむね西日本的特徴を持つ。

また、能登島は東西に広く、島内にも方言差が存在する。本稿で記述するのは、島の中心部に当たる向田（こうだ）地区の方言である。

**【表記について】**本方言では、いわゆるガ行鼻濁音が存在するが、破裂音と区別せず、「ガ、ギ、…」/g/のように表記する。ただし、資料類から引用した用例については、この限りではない。

**【調査概要】**本稿の記述は、向田地区で生育した 80 代女性および 60 代男性への聞き取り調査に基づく。出典の記載のない例文は、調査で得られた例文および話者の自然発話である。また、出典のある用例については、能登島の向田地区以外のものも含むことがあるが、いずれも同様の形式・表現が向田地区でも確認されているものである。なお、用例に付した共通語訳は、「押水」「向田」を除いてはすべて筆者によるものである。ただし、「押水」「向田」においても、一部共通語訳を変更している箇所がある。

# 石川県能登島方言の活用表

《動詞》

| | | 多段型　書く | 一段型　見る | 来る | する |
|---|---|---|---|---|---|
| 終止類 | 断定非過去 | カク | ミル | クル | スル |
| | 断定過去 | カイタ | ミタ | キタ | シタ |
| | 命令 | カケ | ミー | コイ | セー |
| | 禁止 | カクナ | ミンナ | クンナ | スンナ |
| | 意志 | カコ | ミヨ | コー | ショー |
| | 推量 | カクヤロ | ミルヤロ | クルヤロ | スルヤロ |
| 接続類 | 連体非過去 | カク | ミル | クル | スル |
| | 連体過去 | カイタ | ミタ | キタ | シタ |
| | 中止 | カイテ | ミテ | キテ | シテ |
| | 仮定 | カキャ<br>カイタラ | ミリャ<br>ミタラ | クリャ<br>キタラ | スリャ<br>シタラ |
| | 逆接 | カケド | ミレド | クレド | スレド |
| 派生類 | 否定 | カカン | ミン | コン | セン |
| | 丁寧 | カキマス | ミマス | キマス | シマス |
| | 使役 | カカセル<br>カカス | ミサセル<br>ミサス | コサセル<br>コサス | サセル<br>サス |
| | 受身 | カカレル | ミラレル | コラレル | サレル |
| | 可能 | カケル<br>カカレル | ミレル<br>ミラレル | コレル<br>コラレル | 《デキル》 |
| | 尊敬 | カカレル | ミラレル | コラレル | サレル |
| | 継続 | カイトル | ミトル | キトル | シトル |
| | 希望 | カキタイ | ミタイ | キタイ | シタイ |
| | のだ | カクガヤ<br>カクゲ<br>カクゲン | ミルガヤ<br>ミルゲ<br>ミルゲン | クルガヤ<br>クルゲ<br>クルゲン | スルガヤ<br>スルゲ<br>スルゲン |

**多段型動詞の基幹音便形**

| 語幹末子音 | 語例 | | 活用形例（過去形） | 作り方 |
|---|---|---|---|---|
| k | 書く | kak·u | カイ-タ | k を i にする。「行く」ik·u は k を Q（促音）にし「イッ-タ」。 |
| g | 嗅ぐ | kag·u | カイ-ダ | g を i にする。-タが-ダになる。 |
| s | 出す | das·u | ダイ-タ | s を i にする。「貸す」のように音便形をとらない動詞もある。 |
| t/c | 立つ | tac·u | タッ-タ | t/c を Q（促音）にする。 |
| n | 死ぬ | sin·u | シン-ダ | n を N（撥音）にする。-タが-ダになる。 |
| b | 飛ぶ | tob·u | トン-ダ | b を N（撥音）にする。-タが-ダになる。 |
| m | 飲む | nom·u | ノン-ダ | m を N（撥音）にする。-タが-ダになる。 |
| r | 切る | kir·u | キッ-タ | r を Q（促音）にする。 |
| w/ø | 買う | ka(w)·u | コー-タ | w を ø（子音なし）に。w の前の母音が a の場合は o に変える。 |
| | 誘う | saso(w)·u | サソ-タ | 基幹が 1 拍の場合は長音化する。 |

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

| | | 赤い | 静か（だ） | 学生［ガクセー］（だ） |
|---|---|---|---|---|
| 終止類 | 断定非過去 | アカイ | シズカヤ | 学生ヤ |
| | 断定過去 | アカカッタ | シズカヤッタ | 学生ヤッタ |
| | 推量 | アカイヤロ<br>アカカロー | シズカヤロ | 学生ヤロ |
| 接続類 | 連体非過去 | アカイ | シズカナ | 《学生ノ》 |
| | 連体過去 | アカカッタ | シズカヤッタ | 学生ヤッタ |
| | 中止 | アカテ | シズカデ | 学生デ |
| | 仮定 | アカケリャ<br>アカカッタラ | シズカナラ<br>シズカヤッタラ | 学生ヤッタラ |
| | 逆接 | アカカレド | シズカヤケド | 学生ヤケド |
| 派生類 | 否定 | アカナイ | シズカデナイ<br>シズカジャナイ | 学生デナイ<br>学生ジャナイ |
| | なる | アカナル | シズカニナル | 学生ニナル |
| | 副詞 | アコ<br>アコラト | シズカニ | （該当形　欠） |
| | 丁寧 | アカイデス | シズカデス | 学生デス |
| | のだ | アカイガヤ<br>アカイゲ<br>アカイゲン | シズカナガヤ<br>シズカネン | 学生ナガヤ<br>学生ネン |

### 1. 動詞の活用の特徴

#### (1)活用型と語類の対応

規則的な活用型として基幹多段型(以下「多段型」)と基幹一段型（以下「一段型」）がある。おおよそ、多段型にはa類(「書く」・「居る」・「死ぬ」類) 動詞、一段型にはb類（「見る」・「起きる」・「開ける」類）動詞が所属する。

多段型の基幹にはア・イ・ウ・エ・オ段の5形、および、音便形がある。融合によってア段拗音となることもある。「カク」（書く）の場合、カカ-ン（kak·a-N)、カキ-タイ（kak·i-tai)、カク（kak·u)、カケ(kak·e)、カコ(一)(kak·o(R))、カイ-タ(kai-ta)、カキャ（kak·ja）など。また、語幹末子音には、k（カ行)、g（ガ行)、s（サ行)、t（タ行)、n（ナ行)、b（バ行)、m（マ行)、r（ラ行)、w（ワ行）がある。語例は、表「多段型動詞の基幹音便形」を参照。

一段型には、ミ-ル（mi-ru)、オキ-ル（oki-ru）など基幹がイ段の動詞と、ネ-ル(ne-ru)、アケ-ル(ake-ru)など基幹がエ段の動詞がある。一段型の動詞は、「ミル」を例にすると、断定非過去形ミ-ル（mi-ru)、仮定形ミ-リャ（mi-rja)、逆接形ミ-レド（mi-redo）受身形・可能形・尊敬形ミ-ラレル（mi-rareru)、可能形ミ-レル（mi-reru）において、r で始まる接辞が付き、かつ、多段型のr語幹動詞に対応した形となる。

不規則な活用をする動詞に「クル」（来る）と「スル」(為る）がある。ともに一段型に近い活用をするが、「クル」は、キ-タ（k·i-ta)、ク-ル（k·u-ru)、コ-イ（k·o-i）などのように、基幹が「キ」「ク」「コ」の3段に、「スル」は、サ-レル(s·a-reru)、シ-タ(s·i-ta)、ス-ル（s·u-ru)、セー（s·e-(R)）などのように、基幹が「サ」「シ」「ス」「セ」の4段にわたる。「スル」は、ショー（s·joR）のように融合によりオ段拗音となることもある。

#### (2)各活用形の特徴

〈断定非過去形〉

断定非過去形は、「書く」「見る」「来る」「する」がそれぞれ「カク」「ミル」「クル」「スル」となる。

〈断定過去形〉

断定過去形は、多段型動詞の音便形、一段型動詞の基幹（＝語幹)、「来る」の「キ」、「する」の「シ」に「タ」を後接させた形になる。「書く」「見る」「来る」「する」はそれぞれ「カイタ」「ミタ」「キタ」「シタ」となる。

なお、表にも示したように、多段型動詞が過去形を作る際には音便形をとる。語幹末子音が s の場合、「ダイタ」のような音便形が使用されるが、「カシタ」のように、音便形が使用されない動詞もある。この特徴は、中止形や継続形においても同様である。

・センタクモノ　ホイタサケァニ　アメ　フッタラ　イレテクレヤ。(洗濯物を干したから、雨が降ったら入れてくれよ。)

・カマ　{カシタ／×カイタ}。(鎌を貸した。)

**〈命令形〉**

多段型動詞の命令形は、「カケ」のようにエ段形になり、一段型動詞は基幹になる。「来る」は「コイ」、「する」は「セー」となる。終助詞「ヤ」「マ」を伴うことが多いが、必須ではない。

・コレ　ダッチャカンサカイ　ホーレ。(これはだめだから捨てろ。)

・コレ　サトー　イレタサカイ　マワイテ　ノメヤ。(これ、砂糖を入れたからかき混ぜて飲めよ。)

・ほいて村人な、ありゃ見いま、妙蓮ないよいよ気や違うてきたんや、あれまあんなことして海ん中入って、てわろとったがやて。(そして村人は、「あれを見ろよ、妙蓮はいよいよ気が違ってきたんだ、あれまあ、あんなことをして海の中に入って」と笑っていたんだと。)(町史・「閨の妙蓮さん」)

・ナニ　シトライ。　ハヨ　オキマ。(何してるんだ。早く起きろ。)

・いい化け方を教えてやっさかい、全部連れて来いま。(七尾・「きつねと蚊帳」)

・タマニ　オマエモ　ソージ　セーマ。(たまにはおまえも掃除しろ。)

終助詞「ヤ」や「マ」のほかに、「マイヤ」を伴うこともある。この「マイヤ」は終助詞連続と思われる(詳細は未調査)。

・コッチ　ミーマイヤ。(こっちを見ろ。)

また、目下の人物への命令において、多段型動詞ではオ段形を使うことがあるようである。

・アッチ　イコ。(あっちへ行け。)

これは意志形による行為指示とは異なり、「強制」だという。ただし、この形がどのような条件で使用され、どの程度生産性があるかといった詳細は不明である。

**〈禁止形〉**

禁止形は、非過去形に「ナ」を後接させて作る。非過去形が「ル」で終わる多段型 r 語幹の動詞、一段型動詞、「クル」「スル」の場合、「クンナ」のように「ル」が「ン」になることがある。

・サッキカラ　ユートライヤロ。　コッチ　クンナマ。(さっきから言っているだろう。こっちに来るな。)

また、否定形に「トケ」が続く「〜しないでおけ」相当の表現も使用される。

・マダ　タベントケマ。(まだ食べるな。)

さらに、命令形と同様に、オ段の形を使うこともあるようである。

・コッチ　コントコ。(こっちに来るな。)

**〈意志形〉**

意志形は、「書く」が「カコ」(オ段形)、「見る」が「ミヨ」(一段型基幹＋ヨ)となる。長呼して「カコー」「ミヨー」となることもある。「来る」は「コー」(オ段基幹長呼)、「する」は「シヨー」の縮約形である「ショー」が使用される。

・アシタ　マタ　ココニ　コー。(明日またここに来よう。)

・キョーワ　ソージ　ショーカイノー。(今日は掃除しようかね。)

**〈推量形〉**

推量形は、断定非過去形に「ヤロ(ー)」を後接させて作る。過去形に「ヤロ(ー)」を後接させると過去推量を表す。「カクヤロ」のように長呼しないことが多いが、どちらでも構わない。

・アシタ　ワレ　ソーカイニ　イクヤロナー。(明日お前総会に行くだろうな。)

・キンノ　アメ　フッタヤロナー。(昨日は雨が降っただろうな。)

**〈連体非過去形〉**

動詞の連体非過去形は断定非過去形と同形であり、「書く」「見る」「来る」「する」がそれぞれ「カク」「ミル」「クル」「スル」となる。

・「スズメ。おまえ、先に行け。あたしゃ、まだすることあっさけ、あとでいく。」(スズメ、おまえは先に行け。私は、まだすることがあるから、後で行く。)(石川・「スズメとケラ

ツツキ」）

**〈連体過去形〉**

連体過去形は断定過去形と同形であり、多段型動詞の音便形、「来る」・「する」のイ段形、一段型動詞の基幹に「タ」を後接させた形になる。また、多段型動詞の音便形についても断定過去形と同様である。

・かくれとった五平じいさまは、よっしゃ、あのキツネどもをひとつ、こけにおといてやろう。（隠れていた五平じいさまは、「よっしゃ、あのキツネどもをひとつ、騙してやろう」と考えた。）（石川・「長西ギツネ」）

**〈中止形〉**

中止形は、多段型動詞の音便形、「来る」・「する」のイ段基幹形、一段型動詞の基幹に「テ」を後接させた形になる。過去形の場合と同様に、多段型動詞は音便形をとる。

・ある時、馬売りの五平ちゅう大酒のみのじいさまが、その日も酒によっぱらって、家へももどれんほどになって、地蔵様のところでねてしもうたとい。（ある時、馬売りの五平という大酒のみのおじいさんが、その日も酒によっぱらって、家へも戻れないほどになって、地蔵様のところで寝てしまったという。）（石川・「長西ギツネ」）

・地蔵様、地蔵様。けさは地蔵様のいわっしゃったとおり、長さんギツネをだまいて馬市へ行ってこらしめてやりました。（地蔵様、地蔵様。今朝は地蔵様のおっしゃったとおり、長さんギツネを騙して馬市へ行ってこらしめてやりました。）（石川・「長西ギツネ」）

**〈仮定形〉**

仮定形には2種類あり、「バ」に由来する「カキャ」「ミリャ」「クリャ」「スリャ」といった形（多段型動詞の拗音ア段基幹、一段型動詞・「来る」「する」の「基幹＋リャ」）と、多段型動詞・「来る」・「する」のイ段・音便形および一段型動詞の基幹に「タラ」を後接させた形がある。前者の形は、「カキャー」のように長音で実現することもある。

・イマカラ　イキャ　マニオーカナ。（今から行けば間に合うかな。）

・コレ　イジョー　サガリャ　モー　コトバナイヨ。（これ以上（世代が）下がったらもう（伝統的な向田の）ことばはなくなるよ。）

・ミッカ　オリャ　コーダノ　コトバ　オボエルヨ。（3日いれば向田のことばを覚えるよ。）

・ヤッパ　ククル　トキニャ　エダネ　ククッタラ　イーゲイトイネ。（やっぱり括る時には枝に括ったらいいんだね。）（押水）

・タビカラ　オヨメニ　キタラ　カナラズ　アノ　サビシーデショ。（他所からお嫁に来ると、必ず、あの、淋しいでしょう。）（押水）

**〈逆接形〉**

逆接形は、多段型動詞のエ段形に「ド」、および一段型動詞・「来る」「する」の基幹に「レド」を後接させた形になる。また、過去形にも「レド」がつく。

・ソージ　スレド　スグ　ヨゴス。（掃除するけどすぐに汚す。）

・ヨー　タベレド　ゼンゼン　フトランネ。（よく食べるけど全然太らないね。）

・イマデモー　ヤッパリ　ソーユー　モン　ツコーテオレド　ヨー　イマジャ　ソーユガオ　ナンジャ　ケーケンシトッサカイ　タイガイ　エダネ　ンー　ツコーネ。（今でもやっぱりそういうものを使っているが、まあ今ではそういうことを、何だ、経験しているから、たいてい枝に、うん、使う［＝する］ね。）（押水）

・オラッチャ　ヤマニ　コーサエ　ウンデ　キタワイナト　オモーテア　オマエド　アンタ　イマノ　モナ　アバエカエットルワ。（わたしたちは山でこどもさえ産んできたなあと思って、思うが、あなた。今の者は甘えきっているよ。）（向田）

・ホヤネ　マー　サイキンナ　ナイガニナッタレド　ムカシ　ワレワレノ　ジブンニ　アー　ズイブン　コンデ　シェーダイナネウーン　シキオ　シタモンジャネ。（そうだね。まあ最近はなくなったけれど、昔、われわれの若い頃に、ああ、随分これで盛大なね、うん、式をしたものだね。）（押水）

ただし、この形は古い言い方のようで、80代の話者でも同年代の人と話すときにしか使わず、60代の話者は言わないようである。その場合、「カクケド」のように断定形に「ケド」を付した形を用いる。

**〈否定形〉**

否定形は、多段型動詞のア段形、一段型動詞の基幹、「来る」の基幹「コ」、「する」の基幹「セ」に「ン」を接続させて作る。なお、「する」の否定形およびその活用形は「シナンダ」のように「シ」という基幹をとることがある。

・イマワ　ソンナ　イーカタ　セン。(今はそんな言い方をしない。)

・ほしたらまあ魂ちゅうもんは死なんもんやからね、(そしたらまあ魂というものは死なないものだからね)(町史・「継子話」)

また、否定形自体は次のように活用する。

| | |
|---|---|
| 非過去形 | カカン |
| 過去形 | カカナンダ |
| 推量形 | カカンヤロ |
| 中止形 | カカント |
| 仮定形 | カカニャ |
| | カカナンダラ |
| なる形 | カカンナル |
| | カカンガニナル |

・アシテ　ア　ヨー　カゼ　シカナンダ　モンジャネー。(ああしてよくかぜをひかなかったものだねえ。)(向田)

・キンノ　アノヒト　コナンダワ。(昨日あの人は来なかったよ。)

・キャー　ハタケ　セナンダ。(今日は畑仕事をしなかった。)

・それは島中の財産が全部ないがんなっても須曽の長八だけはないがんならんやろといわれたくらいで、(それは、島中の財産が全部なくなっても須曽の長八だけはなくならないだろうといわれたくらいで)(町史・「衣川」)

・ハヤ　ハダカニ　ナッテ　パンツモ　ハカント。　ニネンセーカ　サンネンセーデモヤゾ。(もう裸になってパンツもはかないで(泳ぐ)。2年生か3年生でもだぞ。)

・「いんやあ、ゆるめられん。ここをしっかりしばらにゃりりしい馬に見えん。ちょっこしのしんぼうや。」(いや、緩められない。ここをしっかり縛らなければ、りりしい馬には見えない。ちょっとの辛抱だ。)(石川・「長西ギツネ」)

・そんなこというたかって、祭りにたーたをおそなえしなんだら、神さんがほてたてて村もたんぼもわやくちゃにして、海からも大波をよこすといな。(そんなこと言ったって、祭りに娘をお供えしなかったら、神様が怒って村も田んぼもめちゃくちゃにして、海からも大波をよこすというぞ。)(石川・「サル神さんとしゅけん」)

・アノヒト　ネンガジョー　カカンナッテント。(あの人、年賀状を書かなくなったんだって。)

・そのうちに、声もせんがになって、頭の重いがも軽るーなったがで、起き出して家の人に知らせたとぃね。(そのうちに、声もしなくなって、頭の重いのも軽くなったので、起き出して家の人に知らせたという。)(七尾・「キンナミの話―少し恐い話―」)

**〈丁寧形〉**

丁寧形は、多段型動詞と「来る」「する」のイ段形および一段型動詞の基幹に「マス」を後接させた形で、「カキマス」「ミマス」「キマス」「シマス」となる。ただし、丁寧形はあまり使用されないようである。また、丁寧形自体は、共通語と同様に「マシタ」(過去形)、「マセン」(否定形)、「マシタラ」(仮定形)のように活用する。

・イマ　アンタ　ザ　タタミノ　ウエニ　ザブトン　シーテ　マダ　アシャ　イタイ　ユーテマスゲイネ。(今、あなた、畳の上にざぶとんを敷いて、まだ足が痛いと言ってますよ。)(押水)

**〈使役形〉**

使役形には、「サセル」の形と「サス」の形がある。多段型の基幹ア段および「する」の基幹「サ」に「セル」または「ス」を、一段型の基幹および「来る」の基幹「コ」に「サセル」または「サス」を後接させて作る。

・ゴーロン　ゴロンテ　ホイッテテ　ハヤイテワ　ダンダン　イー　チョーシオ　ツケサセテワー(ゴロンゴロンと「ホイッ」と言ってはやしてだんだんいい調子をつけさせて)(向田)

・これは、ほんとの話や、わしらの子供の時に

母親が聞かしたもんじゃ、（これは本当の話だ。私たちの子供のときに母親が聞かせたものだ。）（町史・「長者ヶ鼻」）

セル系の使役形は一段型動詞と同様の活用をし、ス系は多段型動詞と同様の活用をする。ただし、両系統が同じように使用されるわけではなく、活用形によってどちらを使うかが異なるようである。例えば、過去形の場合は「ノマイタ（ノマシタ）」のようにサス系を主に使用し、否定形の場合は「ノマセン」のようにサセル系を主に使用するようである。

・クスリ　ノマイタ。（薬を飲ませた。）
・クスリ　ノマセンカイヤ。（薬を飲ませろ。）

**〈受身形〉**

受身形は、多段型動詞・「する」の基幹ア段に「レル」、一段型動詞の基幹・「来る」の基幹「コ」に「ラレル」を後接させて作る。なお、受身形自体は一段型動詞と同様の活用をする。

・いつなんどき二ひきのキツネにあだくそされるかわからんもんで、夕さんがた、きっとキツネらちゃ地蔵様のとこに来るやろうちゅうて、わざわざ地蔵様のとこに来たとい。（いつなんどき二ひきのキツネに仕返しされるかわからないので、夕方、きっとキツネたちが地蔵様のとこに来るだろうと言って、わざわざ地蔵様のとこに来たという。）（石川・「長西ギツネ」）
・長さんギツネや首をしめられたもんやさかえ、くるしくて、（長さんギツネは首をしめられたものだから苦しくて、）（石川・「長西ギツネ」）

**〈可能形〉**

可能形は、多段型エ段基幹に「ル」、一段型・「来る」の基幹に「レル」を接続させた「カケル」「ミレル」「コレル」と、多段型ア段基幹に「レル」、一段型・「来る」の基幹に「ラレル」を接続させた「カカレル」「ミラレル」「コラレル」がある。「する」の場合は「デキル」が語彙的に補充される。これら2種類の可能形の間に、肯定・否定や能力可能・状況可能による使い分けは特になく、どちらも使用される。

・コンダー　オレ　オシエテモロテ　トンニイッテクルワイヤ。　コンド　アンタ　トラレンガニ　ナッタラ。（今度は私が教えてもらって（ミョウガを）取りに行ってくるよ。今度あなたがとれなくなったら。）
・コノコワ　ヨーチエンヤサケ　ジー　{カカレン／カケン}。（この子は幼稚園児だから字が書けない。）
・アンタ　ガッコー　イットルサカイ　ジー　カカレルモンネ。（あなたは学校に行っているから字が書けるもんね。）
・ほのかたがね、とってもちんちゃい方でね、お風呂なんかでも、昔こんな木の風呂やったけど、またんで入られんほど小さいがやて。（その方がね、とっても小さい方でね、お風呂なんかでも、昔はこんな木の風呂だったけど、またいで入れないほど小さいんだって。）（町史・「閨の妙蓮さん」）

**〈尊敬形〉**

尊敬形は、受身形と同形である。ただし、動詞の尊敬形はあまり使用されないようである。

・ミツニ　キータラ　トーチャンナー　シナレタテヤン（道で聞いたら、ご主人がなくなられたそうですね）（向田）
・コレカラ　シューカイジョ　イカレライネ。（これから集会所にいらっしゃるんですよね。）
・アシタ　コラレライネ。（明日来られるんですよね。）

**〈継続形〉**

継続形は、一段型動詞の基幹と、多段型動詞、「来る」「する」のイ段基幹に「トル」を接続させて作る。なお、継続形自体は多段型 r 語幹動詞と同様の活用をする。

・子供んときから「エゾの穴」とゆうとったんやけど、衣川てゆうがは、こっちの山から、こっちの川岸までやったと聞いとるげ。（子供の頃から「エゾの穴」と言っていたんだけど、衣川というのは、こっちの山から、こっちの川岸までだったと聞いているんだ。）（町史・「衣川」）

**〈希望形〉**

希望形は共通語と同様に、多段型動詞・「来る」・「する」のイ段形および一段型動詞の基幹に「タイ」を後接させて作る。希望形自体は形容詞と同様の活用

をする。

・ホイタラ　ソノ　オヨギニ　イキタイ　モンジャサカイニ　ネ　ネタカナーテ　ソーット　ネケテワ　ヨー　オヨギニ　イッタワ。（そしたらその、泳ぎに行きたいものだから、「(親が) 寝たかな」と言ってそーっと抜けては泳ぎに行ったよ。）

**〈のだ形〉**

のだ形は、連体形に「ガヤ」を接続させて作る。なお、この「ガヤ」は縮約して「ゲ」のように実現されることが多い。「ゲン」のように撥音を伴うこともある。

・ほして今でも、お酒飲んだそのあとにほうゆう囃しことばがあるがや。（そして今でも、お酒を飲んだその後にそういう囃しことばがあるんだ。）（町史・「衣川」）

・まっかな顔の仁王さんみたいな大男が、両手をひろげて通せんぼしたげ。（真っ赤な顔の仁王みたいな大男が、両手を広げて通せんぼをしたんだ。）（石川・「ムジナと長太」）

・トナリデモ　ホンダケ　チゴーゲンテ。（となりでも、これだけ（ことばが）違うんだよ。）

また、動詞のテンスが非過去の場合、「スライ」「スレン」といった形が使用されることがあるが、これはそれぞれ「ガイ（＜ガヤ）」「ゲ（ン）」が動詞と融合したものと考えられる。

・ヤッパリ　ムカシノ　コトバ　デライテ。（やっぱり昔のことばが出るんだよ。）

・ナンデ　ソンナトコ　イカイ。（なんでそんなところに行くんだ。）

・（ミョウガの栽培方法について聞かれて）ネガ　アルトネ　フエレンネ。（根があるとね、増えるんだよね。）

・ツカイナレタ　コトバ　デテクレンテ。（使い慣れたことばが出てくるんだよ。）

動詞のテンスが過去の場合、過去の「タ」が融合した「テン」も使用される。

・ナンデテ　オレ　ソコニ　シャシン　デトッテンテ。（なんでかというと、私、そこに写真が出ていたんだよ。）

・草がね、寺の境内だけにおえる、これぐらいの長さの草がたくさんおえとったがや、ほれを干いて粉にして、切り傷のところあてりゃ必ずひっついてん。（草がね、寺の境内だけに生える、これぐらいの長さの草がたくさん生えていたんだ。それを干して粉にして、切り傷のところに当てれば必ずくっついたんだ。）（町史・「妙万寺の妙薬」）

なお、この「ゲン」は加賀地方にも広がり、現在の若年層が盛んに使用している（新田 2004、野間 2015）。どのように広がったかは不明だが、おそらく能登地方から「ゲ」および「ゲン」が広がり、若年層がそのうち「ゲン」を自分たちの体系に取り込んだものと思われる。

## 2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

**【形容詞】**

形容詞の活用型は一つである。語幹末が a の形容詞には交替語幹があり、a を o に変える。例えば「アカイ」なら、語幹「アカ」の交替語幹は「アコ」である。この交替語幹は、主に副詞形において現れる。

**〈断定非過去形〉**

形容詞の断定非過去形は、語幹に「イ」を後接させたものである。

・ヒエイタガ　タカイジャ。（冷やしたのは高いよ。）（向田）

**〈断定過去形〉**

形容詞の断定過去形は、語幹に「カッタ」を後接させたものである。

・アー　アツカッタオイ。（ああ、暑かったよ。）（向田）

**〈推量形〉**

推量形は、動詞と同様に断定形に「ヤロ（ー）」を後接させて作るが、語幹に動詞的な接辞のオ段長音形「カロー」を後接させた形も併用される。

・カキ　ハヤ　{アカカロー／アカイヤロー}。（柿がもう赤いだろう。）

・ソレワー　ソンナ　コトジャ　ナカロネー。（それはそんなことではないだろうね。）（押水）

**〈連体非過去形〉**

連体非過去形は断定非過去形と同形で、語幹に「イ」を付した形になる。

・ほこにも田んぼの用水にちさい石の橋があっ

て、（そこにも田んぼの用水路に小さい石の橋があって、）（町史・「長者ヶ鼻」）

**〈連体過去形〉**

連体過去形は断定過去形と同形で、語幹に「カッタ」を付した形になる。

・よう働いたあとのにぎりめしはうまかったもんで、大須古は、つづけざまに、にぎりめしを口に入れとったんやと。（よく働いた後の握り飯はうまかったものだから、大須古は、続けざまに握り飯を口に入れていたんだと。）（石川・「大須古とネズミ」）

**〈中止形〉**

中止形は、「アカ（ー）テ」のように語幹およびその長音形に「テ」を後接させて作る。

・若い衆たちは淋しーておそろしーて、やっと家へ帰って来たといね。（若い衆たちは淋しくて恐ろしくて、やっと家へ帰って来たという。）（七尾・「キンナミの話―少し恐い話―」）

・みかんやとおもてとんに行けば、なんや苦がて食べられん。（みかんだと思って取りに行くと、なんと苦くて食べられない。）（町史・「長者ヶ鼻」）

**〈仮定形〉**

仮定形は、語幹に「ケリャ」を後接させて「アカケリャ」のように作る。また、「アカカッタラ」のように語幹に「カッタラ」を後接させた形も使用される。

・ジョーズニ　カカレンサカエ　モッショーテモ　エーケリャ　カコカナ。（上手に書けないから、おかしな字でもよければ書こうかな。）

**〈逆接形〉**

逆接形は、動詞の場合と同様に断定形に「ケド」を後接させた形が使用されるが、動詞的な接辞のエ段形「カレ」または「ケレ」が続き、さらに「ド」を付した「アカカレド」といった形も使用される。

・アカカレド　ンマナイワ。（赤いけどおいしくないよ。）

・アレオ　ウッター　ヤッパー　アブラケァナケレド　アンデ　ケッコー　アッサリシテ　ウマイモンヤ。（あれを撃った、やっぱり油っ気はないけれど、あれでけっこうあっさりしてうまいものだよ。）（押水）

**〈否定形〉**

否定形は、語幹に「ナイ」が続く「アカナイ」といった形になる。なお、否定形自体は形容詞「ナイ」と同様の活用をする。

・マダ　アカナイサケ　タベレンワ。（まだ赤くないから食べられないよ。）

・アカナケリャ　ダメヤ。（赤くないとだめだ。）

・アンマリ　アツナカッタナー。（あまり暑くなかったね。）

**〈なる形〉**

なる形は「アカナル」のように語幹の形になる。また、断定非過去形に「ガニナル」がつく表現もある。

・カキャー　アカ　ナッタナ。（柿が赤くなったな。）

・キョーワ　クサ　クロー　ナッタガ　ヨッツトッテ　ホカイテキタワ。（今日は草の黒くなったのを4つとって捨ててきたよ。）

・アカイガニ　ナッタナ。（赤くなったな。）

・この前には〈高なれ、ポンコ、ポンコ〉と叩いたがで高なったがやけど、今度は〈低なれ、ポンコ、ポンコ〉とやったがで、娘さんの鼻は、“ポンコ、ポンコ”と低うなって、元通りに治ったといね。（この前は「高くなれ、ポンコ、ポンコ」と叩いたので高くなったんだけど、今度は「低くなれ、ポンコ、ポンコ」とやったので、元通りに治ったという。）（七尾・「天狗の太鼓―ひきづなのさんにょもん話―」）

**〈副詞形〉**

副詞形は、基本語幹または交替語幹と同形だが、交替語幹に「ラト」を後接させた形も存在する。

・アサ　ハヨラト　オーシケニ　イッテキテ（朝早く大敷（網元）に行ってきて）

・マー　アサ　ハヨー　ムカシノ　ゴジカ　ロクジ　シタウチャ　マダ　ウスグラ カ ッ タ　ヨーナ　トキニ　オキテワ　アンデ　ソノトシノ　マー　ハジメテノ　アンデ　シコトヤ　シコ゜トハジメヤッタンヤ。（まあ、朝早く、昔の5時か6時したうちは、まだ薄暗かったような時に起きては、あれでその年

の、まあ初めてのあれが仕事だ、仕事始めだったんだ。)(押水)

**〈丁寧形〉**

丁寧形は、断定形に「デス」を後接させた形である。しかし、動詞の場合と同様に、本方言において丁寧形はあまり使用されない。

・カキガ　アカイデス。(柿が赤いです。)

**〈のだ形〉**

のだ形は、断定形に「ガヤ」や「ゲ(ン)」を後接させて作る。過去形の場合、「アカカッテン」のように「カッテン」が語幹につく。

・おう、その白いのが、いいがやちゃー。(おう、その白いのが、いいんだよ。)(七尾・「きつねと蚊帳―ひきづなのさんにょもん話―」)

・コレ　ウマイゲンゾ。　ヨバレンカ。(これ、おいしいんだぞ。食べろ。)

・コノ　モナ　ナマエガ　エーゲイテ。(この人は名前がいいんだよ。)

**【形容名詞述語・名詞述語】**

**〈断定非過去形〉**

断定非過去形は、「シズカヤ」「学生ヤ」のように、形容名詞・名詞ともに「ヤ」を後接させた形になる。

・オイ　デカイ　コヤワイノー　ンマソーヤノ(ああ、大きい子ですね。福々しいですね。)(向田)

・イマノ　ヒトラチャ　コトバ　キレーヤサカエ　ウミー　イッテ　オヨイデコンカッテイーゲイネ。(今の人たちはことばがきれいだから、「ウミー　イッテ　オヨイデコンカ」って言うんだよね。)

**〈断定過去形〉**

断定過去形は、「シズカヤッタ」「学生ヤッタ」のように、形容名詞・名詞ともに「ヤッタ」を後接させた形になる。

・ホテルミタイナ　チューガッコヤッタ。(ホテルみたいな中学校だった。)

・ハエー　イチジニジカラ　オキテー　イネンジッソクモ　コクトキャ　イッショケンメヤッタワ。(もう 1 時、2 時から起きて稲を 10 束もこくときはいっしょうけんめいだったよ。)(向田)

**〈推量形〉**

推量形は、形容名詞・名詞ともに「ヤロ」を後接させた「シズカヤロ」「学生ヤロ」といった形になる。

・アノ　マダー　ランポノ　イリ　ネャー　トキャー　シェキユノ　イリ　ネャー　トキヤロ。(あの、まだランプがたくさんはないときには、石油がたくさんはないときでしょう。)(向田)

**〈連体非過去形〉**

連体非過去形は、形容名詞と名詞とで形が異なる。形容名詞は、「シズカナ」のように「ナ」を後接させた形になる。一方、名詞の場合、述語としての形はなく、「学生ノ」のように助詞「ノ」が後接した形を使用する。

・後ろを見ると、又次も、ほうちょうもってしんけんな顔しとるもんで、にがわらいするしかなかったと。(後ろを見ると、又次も、包丁を持って真剣な顔をしているので、苦笑いするしかなかった。)(石川・「能登の又次」)

**〈連体過去形〉**

連体過去形は断定過去形と同形で、形容名詞・名詞ともに「ヤッタ」を後接させた形になる。

**〈中止形〉**

中止形は、形容名詞・名詞ともに「デ」が後接した「シズカデ」「学生デ」といった形になる。

**〈仮定形〉**

「ヤッタラ」と「ナラ」が使用される。「ナラ」は標準語的ではあるが、「タッシャナラ」のように、形容名詞の一部においては「ナラ」が自然であることもある。

・ガクセーヤッタラ　ハンブンヤ。(学生だったら半額だ。)

・モー　チョッコシ　タッシャナラ　ヨカッタニナー。(もう少し元気ならよかったのになあ。)

**〈逆接形〉**

名詞述語の逆接形は、断定非過去形に「ケド」がついた形になる。また、過去形にも同様に「ケド」がつく。

・子供んときから「エゾの穴」とゆうとったんやけど、衣川てゆうがは、こっちの山から、こっちの川岸までやったと聞いとるげ。(子供のときから「エゾの穴」と言っていたんだ

けれど、衣川というのは、こっちの山から、こっちの川岸までだったと聞いているんだ。）（町史・「衣川」）

・お風呂なんかでも、昔こんな木の風呂やったけど、またんで入られんほど小さいがやて。（お風呂なんかでも、昔はこんな木の風呂だったけれど、またいで入れないほど小さいんだって。）（町史・「閨の妙蓮さん」）

**〈否定形〉**

否定形は、「シズカデナイ」「学生デナイ」のように「デナイ」の形になる。否定形自体は「ナイ」と同じ活用をする。また、「（ト）チガウ」を用いた表現もある。

・アノ　モナー　ハヤ　ガクセーデ　ネーゲンヤ。（あの人はもう学生じゃないんだよ。）

・アノ　モナー　ハヤ　ガクセー　チゴゲンヤ。（あの人はもう学生じゃないんだよ。）

・ムカシワ　フネデ　ナケリャ　ワタラレナンダ。（昔は船でなければ渡れなかった。）

・ニャーニャテ　ユーガワネー　ベツニ　コノヘンデ　ナーテモ　イシカワケンワ　ダイタイ　ワカレンヨ。（「ニャーニャ」というのはね、別にこのへんでなくても石川県はだいたいわかるんだよ。）

**〈なる形〉**

なる形は、「シズカニナル」「学生ニナル」のようになる。「ニ」は「ン」となることも多い。

・ほんな人がなかなか仏法信者んなってね、ほいて托鉢にずっと歩きなさったがや（そんな人がなかなか仏法信者になってね、それで托鉢にずっと歩かれたんだ。）（町史・「閨の妙蓮さん」）

**〈丁寧形〉**

丁寧形は、「シズカデス」「学生デス」のように「デス」を後接させる。ただし、本方言では、丁寧体はあまり使用されない。

**〈のだ形〉**

のだ形は、「ナガヤ」およびその変異形を後接させて作る。

・ソンナガイネ。（そうなんだよね。）（押水）

また、「ネン」を後接させることもある。

・ダカラ　オジサンネンテ、　ヨーワ。（だからおじさんなんだよ、要は。）

・カナザワシネンケド　ソノ　シューヘンノトコオ　ヤマテ　ユーガイネ。（金沢市なんだけど、その周辺のところを「山」と言うんだよ。）

過去形の場合、動詞と同様に、「テン」を使って「学生ヤッテン」のようになる。

・ほいて、ほれ見て初めて村の人ら、やっぱりほんなら火事やってんな、てゆうことがわかったんやて（そして、それを見て初めて村の人たちは、やっぱり火事だったんだな、ということがわかったんだと）（町史・「閨の妙蓮さん」）

**用例出典**

石川：石川児童文化協会編（2005）『読みがたり　石川のむかし話』日本標準

押水：国立国語研究所編（2004）『全国方言談話データベース　日本のふるさとことば集成　第10巻　富山・石川・福井』国書刊行会

石川県羽咋郡押水町（現・宝達志水町）

向田：日本放送協会編（1999）『全国方言資料』NHK出版［石川県鹿島郡能登島町向田（現・七尾市能登島向田町）］

町史：竹内康平・樋渡登（1983）「第5章 島の言語伝承―昔語りと言葉―」能登島町史専門委員会編『能登島町史 資料編第2巻』能登島町役場

七尾：新田露子（1996）『七尾地方の方言集』友興企画

**参考文献**

川本栄一郎（1983）「石川県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 6　中部地方の方言』国書刊行会

新田哲夫(2004)「石川県金沢方言のガヤとその周辺」中井精一・内山純蔵・高橋浩二編『日本海沿岸の地域特性とことば―富山県方言の過去・現在・未来―』桂書房

野間純平（2015）「石川方言におけるノダ相当形式―新形式の成立過程に注目して―」日本方言研究会編『方言の研究　1』ひつじ書房

（野間純平）